

# 「岡崎王国」という言葉

## ～近世・近代の物流と岡崎文化～

愛知学泉大学 コミュニティ政策学部

教授 岡田 洋司



### はじめに

今日は、『「岡崎王国」という言葉』というテーマでお話いたします。この中でこの言葉をお聞きになった方、どのくらいございますか。多分お聞きになったことのある方は少ないかと思えます。インターネットで検索しましても、少なくとも歴史的な言葉としての「岡崎王国」はないようです。

まず、最初にお手元の資料をご覧ください。私がこの「岡崎王国」という言葉に気がつきましたのは、今から20年程前、『新編岡崎市史』の近代の巻の編集をさせていただいておりましたときのことでした。その資料を集める中で気がついたひとつの新聞記事がございました。『新愛知』、今の中日新聞です。その大正5年6月18日という日付の記事です。この大正5（1916）年が岡崎にとって大きな意味のある年であったことはお気づきかと思えます。要するに岡崎が市になった年です。そして、岡崎が市になるということでしたので、県下の新聞がいろいろな形で岡崎について取り上げるわけです。これは、そのうちのひとつの新聞記事です。「東京支局一記者」が執筆者の「岡崎概観」という連続の記事の最初の部分です。その中にこういう一節があります。

米、綿、木綿、石材の産地として岡崎は、古来から有名であるが、更に見通ごすことの出来ない問題は、三河の半国即ち西参五郡（碧海、幡豆、額田、東西加茂）の上に君臨して昔ながらの岡崎王国を築いて居る、五郡に対し貨物の集散場であるという一大天業の地利を占めてある点をいふのである（東京支局一記者「岡崎概観」二『新愛知』1916年6月18日）。

ここで「岡崎王国」という言葉が使われています。岡崎は江戸時代、東海道の重要な宿場町でした。それだけでなく、矢作川の水運によって西三河の各地ともつながっていました。そして矢作川沿いの地域で栽培された綿花とか、菜種、そういったものはいったん岡崎の町に入り、また岡崎から各地に出荷されていました。そのように岡崎が西三河の物流の

中心である、という意味でこの「岡崎王国」という言葉ができたのだらうと思います。

この「岡崎王国」という言葉がいつ頃できて、いつぐらいまで使われたかよくわかりません。戦前の岡崎の新聞を見ましても、この時期には若干この言葉はあるのですが、その前後には見当たりません。そもそも明治期の岡崎の新聞がなかなか見当たりません。『岡崎朝報』とか『新三河』とかいろいろ新聞ありますけれども、断片的な形でしか残っておらず、図書館にもほとんどありません。そこで推測するしかないのですが、だいたい明治後半から大正にかけての言葉かと思っています。江戸時代には多分、「王国」という言葉は使わないと思います。逆に昭和になってしまうと、また「王国」という言葉には違和感があって、これも使っていないだらうということで、多分明治の後半から大正あたりまでの言葉かという感じはしています。もし何かご存知な方があればお教え願えればと思います。

先程岡崎は物流の中心であると申しました。実は、先回、今から2年前か3年前かことになりますが、その時にお話したのは“文化”の問題なので、今回は、そうした経済的な要素が文化の背景になっているという話を、江戸時代から明治にかけての問題としてお話ししたいと思います。本来私の研究対象というのは、明治末から大正あるいは昭和前期なので、専門外のことがかかり入り、あるいはほとんどもないことを申し上げるかもしれませんが、ご容赦いただきたいと思えます。

### 日本の中心あれこれ

まず「岡崎王国」という言葉、要するに岡崎が西三河の中心・真ん中であるという意味だと申しあげました。歴史研究者の悪い癖で、言葉の意味を詮索するのが大好きで、中心とか真ん中というのは、普通どんな形で使われているのかと考えました。そこで全く岡崎と関係ないところから話をはじめます。



日本まん真ん中センター（岐阜県郡上市美並町）

立派な建物です。これは「日本まん真ん中センター」といいます。岐阜県、今は例の町村合併で変わりましたが、昔は郡上郡美並村といました。今は郡上市美並町といます。東海北陸道が通っています。「日本まん真ん中センター」はその郡上市美並町にあります。要するにそこが“日本の真ん中”にあたるということです。そこでそれを観光資源として売り出すということで、旧美並村が建設したのがこの建物です。村おこしのためでした。問題はその時点では確かにこれは日本のある意味で真ん中だったのです。ところが実は数年経ったら真ん中ではなくなったのです。真ん中は岐阜県関市に移ってしまったのです。

その意味は後で説明することにして、先程の話に戻りますが、例えば中部地方でも、これ以外にも自分のところが“日本の真ん中”だと称している地域がいくつもあります。あるいはそれをうたっているイベントもあります。例えば最近けっこう話題になっている名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」。これ8月下旬の1番名古屋が暑い時期に皆んな一生懸命踊ります。そういうお祭りがあります。これも名古屋が日本のど真ん中だという捉え方です。それから次は先程ちょっとお話ししかけたが、岐阜県関市。刃物で有名な関市です。そこは「日本の人口中心地」といいます。どういうことかといいますと、日本人が全て同じ体重とする。例えば50キロなら50キロとします。そして日本人全体で「やじろべえ」を作るわけです。そうするとその「やじろべえ」を立てると中心になる点があります。そこが実は岐阜県関市なのです。その意味で関市は日本の中心なのです。「人口中心地」という言い方をします。実は先程の美並村が「日本まん真ん中センター」を造った時は美並村が日本の人口中心地だったのです。ところがその後日本の人口の動向の変化が起きまして、残念ながら美並村は中心ではなく、関市が中心

になってしまったのです。

また別の例を挙げます。石川県珠洲市<sup>すずろっこうき</sup>禄剛崎という場所があります。ここには「日本列島のまん中の碑」というのがあります。ここは、国土地理院が認定しました「日本の国土の重心」なんだそうです。つまりこれは日本列島の重量の中心です。正確にいきますと、場所は珠洲市ではなくて、珠洲市の沖合何キロかにあります。海の中に碑を造るわけにいきませんので一番海寄りの禄剛崎に碑が造られたのだそうです。だからこれも日本の中心です。関市とか美並町、それからこの珠洲市の場合は物理的な意味です。人口、あるいは日本の国土というものがあって、その重さという物理的な意味で計っていくところが日本の中心だという、そういうことです。それに対して名古屋のお祭りが「にっぽんど真ん中」を名乗っている。これは今いったことといえば漠然と名古屋が日本列島の中心らしいという以外に根拠はないわけです。何が根拠かといいますと、名古屋こそ日本の中心だ—「中京」という言葉がありますね—という自負心と都市としての位置の問題だろうと思います。

### 西三河の交通の中心岡崎

そこでやっと岡崎の話になるわけです。岡崎の町というのは、戦国時代に町として形成されたわけです。その時期、三河はどんな状態であったかといいますと、今の豊田市松平町を中心とした山地を支配していた松平一族、それが徐々に三河の平野に進出し、一族がそれぞれあちらこちらに分かれて、それぞれ小さなお城を造ったというような状況でした。例えば安城の歴史博物館というのをご存知ですか。大変立派な施設ですけれども、その場所に安祥城という小さなお城があった。それを造ったのは松平一族のうち安祥松平といます。他の松平氏もあちらこちらに城を造り、それぞれ勢力を拡大していきました。そして最終的にはこの一族から徳川家康が出るのですが、その過程、その中間の段階で岡崎の町ができたわけです。

もともと岡崎は小規模な城のある菅生郷という集落でした。ところが三河安祥の武将で家康の祖父にあたる松平清康が大永4年(1524年)、自分の後見役ですが自分の命令に従わない松平信貞を攻め、岡崎に入ってきた。そしてそこを町として整備した。これが岡崎の町の起こりです。つまり松平一族が三河全体を統一する中で、岡崎という町も生まれてきたわけです。その後江戸時代に入りますと岡崎藩が成立して明治にいたるといのが簡単な歴史です。

岡崎藩は5万石でした。5万石というのは大きい

のか小さいのか。例えば尾張藩は約62万石です。加賀藩、これは103万石です。「加賀百万石」といいますが、逆にいいますと加賀藩だとか尾張藩というのは、例外です。だいたい全体的には数万石規模の藩も結構多く、5万石というのは大きくもないんだけど、まあさして小さくもないという規模の藩です。地図をご覧ください。



城下町岡崎と現在の岡崎市中心部  
(岡崎アーカイブスセンター制作)

この地図ですが、岡崎アーカイブスセンターという団体がありまして、その木村剛也さんという方が戦前の岡崎の写真を集めて、それをデジタル化しておられます。その作業の中でこの地図を作られました。線で囲ってある部分が、城下町としての岡崎です。ですから現在に較べれば随分小さいのです。旧東海道が真ん中を走っています。そしてお城があって、その周りを町が取り囲んでいるというのが、岡崎の城下町です。ところで、いわゆる「二十七曲り」はご存じですね。要は、岡崎の城下町の中で東海道は回りくねっているわけです。今から見ればこれは不便です。本来、城下町は軍事的な拠点です。とすれば道を真っ直ぐ通してすぐお城に行けるようにしたら、もし戦争になったら、すぐにお城は攻められます。それではまずいので、こうした曲がりくねった道になっているわけです。典型的に残っているのは金沢だと思いますが、随分道も狭いですし、なかなか市街地の端から端へ真っ直ぐに行きにくいという状況は今でもあります。岡崎の場合は、今は国道1号線という形で真っ直ぐになっていますけれども、江戸時代にはこういう曲がりくねった道でした。

少々脇道にそれましたが、「岡崎王国」つまり岡崎が西三河の中心であるということは、物理的な問題ではなく、都市機能、あるいは都市の位置の問題です。つまり岡崎という都市は、西三河の、少なくとも物流の中心であったということです。その前提

として考えていきたいのは交通の問題です。簡単にいいますと岡崎は、江戸時代、交通の要所だったわけです。これには3つほど意味があると思います。

ひとつは先程来お話しています、東海道の宿場町であるということです。ちょっと復習させていただきますと、五十三次の33番目が二川宿、豊橋市内ですね。それから34番目が吉田、つまり豊橋です。そこから御油に入りまして赤坂を通ります。ここまでは豊川です。それから藤川宿、ここは岡崎市です。それから岡崎、池鯉鮒、さらに尾張に入りまして鳴海、それから宮というルートです。ということで、現在の岡崎市域の真ん中を東海道が横切っていた—正確には曲がりくねりながら—わけです。今の岡崎にはいろいろな形で宿場町の跡が残っています。



伝馬通にある旧東海道をしめす石碑

たとえば、これをご覧になったことありますか？ 東海道岡崎宿西本陣跡の石碑です。伝馬通にあります。もう一つは、二十七曲りを説明した碑です。

二つ目は、これは多分ここにおいでの方々ですとある程度ご記憶になっているかと思いますが、矢作川の水運です。今から見ると川を運送に使っていたというのは、なかなか感覚的には理解しにくいと思います。しかし、水運というのは江戸時代には、実

質的な物流の中心です。先程東海道の話をしてきましたが、実は日本の街道の物資の輸送量というのはそんなに多くありません。ヨーロッパでは馬車が発達していましたが、ところが日本の場合には馬車がないのです。ですから、どうなるかという水運に頼るしかないのです。あるいは、その逆で水運が発達していたので、馬車が発達しなかったということかもしれません。水運といいますとどうしても海運を連想しますね。菱垣廻船とか樽廻船などの大規模なものもありましたが、三河湾や伊勢湾にしても航路が網の目のようにありました。この前廃止かどうかで問題になりましたけれども、伊良湖から鳥羽に行くフェリーがあります。あのルートは当然江戸時代にもあったわけです。むしろ大きな荷物を運ぶのは、あいったルートが普通だったわけです。それから知多半島にもいろいろな航路がありました。例えば内海船<sup>うつみぶね</sup>というのですけれども、知多半島の内海から木綿を積みまして、どこまで行くか。小さな船です。小さな船で江戸まで行くのです。これらのことについては、村瀬正章先生や青木美智男先生の研究をご覧ください。

ところが、先程も申し上げましたように、海だけではなく、河川が実は非常に大きな役割を果たしていた。矢作川はまさにそれなのです。そのことは、「五万石でも岡崎さまはお城下まで船がつく」という小唄「岡崎」の歌詞がしめしています。

江戸時代の物流の中心は水運であり、矢作川は三河の水運に大きな役割を果たしていたのです。矢作川があったからこそ、いろんな物資を岡崎まで運ぶことができた。それから岡崎からまた外に出すことができたわけですね。また、街道や三河湾・伊勢湾の海運とも結び付いていたのです。

それから岡崎が西三河の交通の要所という意味の三つ目ですが、岡崎が西三河のいろいろな街道・往還の中心点であったという意味です。これは細かくはいいませんが、西三河の各都市(西尾・刈谷・挙母)と岡崎の間には、街道や往還が網の目のように張りめぐらされていました。挙母道(矢作—挙母)・西尾道等々です。そうした街道は今大抵国道になっていますけれども。要は岡崎というのはこうした街道の中心であったわけです。

## 西三河の産業と物流の中心としての岡崎

「岡崎王国」という問題にもどりますが、では交通機関を使って何を運んできたのか。あるいは何を運んで行ったのかという問題です。

『百姓伝記』という有名な本があります。これは今でも岩波文庫に入っておりまして、ちょっと手に

入れにくいかもしれませんが、読めない本ではありません。これは元禄時代の「農書」、つまり農業技術書です。これを誰が書いたかということはありません。多分、矢作川沿いに住んでいる農業をしている人なのだけれども、元々武士の人じゃないかと岩波文庫の古島敏男先生の解説にはあります。この地域の農業の事情がいろいろこの中には反映しているのだらうということも一般的にいわれています。問題は、どんな作物の栽培法がここに書かれているかということです。もちろん米は前提です。それ以外にどんな作物の栽培方法が書かれていたかということです。たとえば、「だいこん」「かぶら」これは当たり前ですね。それから「からし」「ちさ」、つまり「ちしゃ」ですね。それから「ほうれんそう」「にんじん」「なすび」「すいくか(すいか)」です。それから「夕がお」「めうが(みょうが)」「あさつき」「たで」などというものもあります。もしこれらの作物が現実の西三河で栽培されていたとしたら、意外にいろんな物が栽培されていたわけです。「夕がお」は何に使うかご存知ですか。「かんぴょう」です。「夕がお」は「かんぴょう」の材料ですね。そのあと「めうが(みょうが)」「あさつき」「たで」です。「めうが(みょうが)」今でもスーパーにいっぱい売っています。ただこれを食べると物忘れがおきるということは、今あまり伝わっていないようですね。それから「あさつき」「たで」。どちらも香辛料、薬味です。たでは、鮎の塩焼きにつきものの蓼酢に使います。

江戸時代の農業というのは基本的には稲作です。ところが米を作ることは、即自分たちに経済的にプラスになるとは限らない。つまり米というのは、年貢として納めるものです。六公四民とか、七公三民っていいです。少なくとも江戸時代半ばだったら、米を作っても6割も税金として納めなくては行けない。残り4割残ります。じゃあその4割全て自分の生活のために使うことができますか。できません。たとえば来年用に籾をとっておかないといけません。それから江戸の半ばになってきますと買う肥料、金肥といいますが、それを買う必要もあります。農器具も。つまり生産費が必要です。ですからお米を作ることは農業の基本なのですが、それを作ったからといって、自分たちの経済的なプラスにはなかなか結びついていかない側面があります。それに対して野菜、「小物成」というのですが、税率が低くて、そういったものを作るというのは自分達の現金収入になってくるわけです。ここでもそれがありません。こういう作物を「商品作物」といいます。作物は商品に決まっているじゃないかと、普通お思いで

しょう。だけど先程申しましたように米は商品とは言いにくいのです。ですからそれ以外の物を西三河で作っているということは、この地域は、農業上からいえば非常に発達している地域だということがいえます。

その場合、西三河の代表的な商品作物は“綿の木”です。

この綿というのは、どういうところで栽培できるか。綿というのは肥えた黒い土よりはもっと水はけのいい砂が混ざったような土壌に適しています。そうしますと扇状地が栽培に適していることとなります。現実には矢作川の中流から下流にかけて、安城や碧南の北部、それから岡崎の南部ですね。そういったところで大量に栽培されてきたのです。そして、この矢作川下流で栽培された綿が岡崎に持ち込まれます。『新編岡崎市史 近世』(1992年)によりますと、幕末(1864年)の下青野村(下青野町)には、26人の商人がいました。棒手振8、木綿買ほか7、酒ほか5、とうふ・菓子2…。まず棒手振<sup>ぼてふり</sup>です。つまり天秤棒にカゴを前後に掛けて野菜を入れて売って歩くという零細な商人です。それから次にあるのが木綿買という商人なのです。この木綿買は村で暮らしていて、村で栽培している綿の木の実、これを買っていくのです。あるいは農家でこれを糸の状態にまでしまして、その糸を買っていきます。これを岡崎の伝馬町を中心に店を構えている木綿問屋に持ち込みます。そして、先程述べました木綿でいいますと等級別にして、“三河木綿”としてブランド化し、それを西尾の平坂湊<sup>へいさかみなと</sup>に運びまして、そこから伊勢湾を横切って松阪に持って行く、あるいは江戸等に持って行きます。

それから矢作川沿岸にはもうひとつ大きな、商品作物があります。

いちめんの菜の花のはなざかりをゆく

これは1939(昭和14)年4月に「漂泊の俳人」種田山頭火が六ツ美村(岡崎市中島町)で詠んだ自由律の俳句です。4月ですから菜の花が咲いていて、その中を山頭火が通っていく。とてものどかだしー山頭火の気持ちからすればのどかではなかったのですが、またありふれた風景かなと思うわけです。ところが、この菜の花は、もちろん全国いろいろな地域で栽培されていますが、矢作川下流地域では非常に大量に栽培されていたのです。ではこの菜の花は何に使ったのでしょうか。たとえば、菜種油です。別におひたし専用ではありません。むしろ産業としていうとこれは油なのです。江戸時代は油を何に使ったか。例えば灯りですね。普通庶民が使う灯り用の油は、油桐という植物から採った油を使いま

た。ところが油桐の油というのは実は不都合があります。燃やすと臭いのです。また明るくない。それに対して菜の花=菜種から採れた油は上等なのです。もちろん天ぷら油に使いますから、匂いもいいのです。ですからこれは上等な灯りの油として用いられていました。もちろん食用にも使われました。もうひとつポイントなのですけれども、今でもお使いと思いますけれども油粕、つまり菜種油を絞った粕がありますね。それはとてもすぐれた肥料です。これも商品価値が高い。つまり菜の花=菜種は重要な商品作物なのです。それも岡崎の町に入り、またそこから出て行きます。

その他で岡崎に集積されたものといいますと、塩です。この話はあとでします。それから地場産業としての八丁味噌、それから石製品ですね。ちなみに戦前あちらこちらというか日本中のほぼ全部に二宮尊徳の石像ができました。二宮尊徳の石像というのは、どこが産地かという岡崎です。銅像は富山県の高岡、石像は岡崎なのです。

それから花火。これも地場産業として大変おもしろいものです。今でもそうですけれども、これは、やはりこの地域の豊かさの象徴ですね。つまり1発、ドーンと上げてそれでおしまいというのは相当贅沢です。それを結構やっていたというのは、これはやはり岡崎が相当豊かな地域であるという証拠です。花火には原料として硝石<sup>しょうせき</sup>というのを使います。硝石は日本にはありません。ところが江戸時代に硝石を作る方法が発見<sup>はつみん</sup>というか発明されたんです。材料はこれも地域の産業と関係あるのですが実は蚕の糞です。江戸後期から明治・大正にかけて、この地域は養蚕も盛んでしたから、農家では蚕の糞がいっぱい出ます。そこにおしっこをかけておく、人間のです。そしてそれを半年から1年熟成させると、硝石ができるという、そういう技法が発明されて、そこから花火が一般化したのです。まあそれはちょっと余談です。

とにかく木綿・菜種等の特産品が、先程述べましたさまざまな交通手段によって、周りの地域から岡崎に入り、岡崎からまた全国に出荷されていったのです。その意味で岡崎は、西三河の流通の中心であり、まさしく「岡崎王国」だったのです。

## 岡崎の塩座と「塩の道」をめぐる

先程水運と街道の話をしました。話を少し発展させてみようと思います。突然、長野県善光寺が出てまいります。その善光寺ですが、境内、入ったところに全国のいろんな地域から寄進された常夜灯が何基もあります。これはそのうちのひとつです。

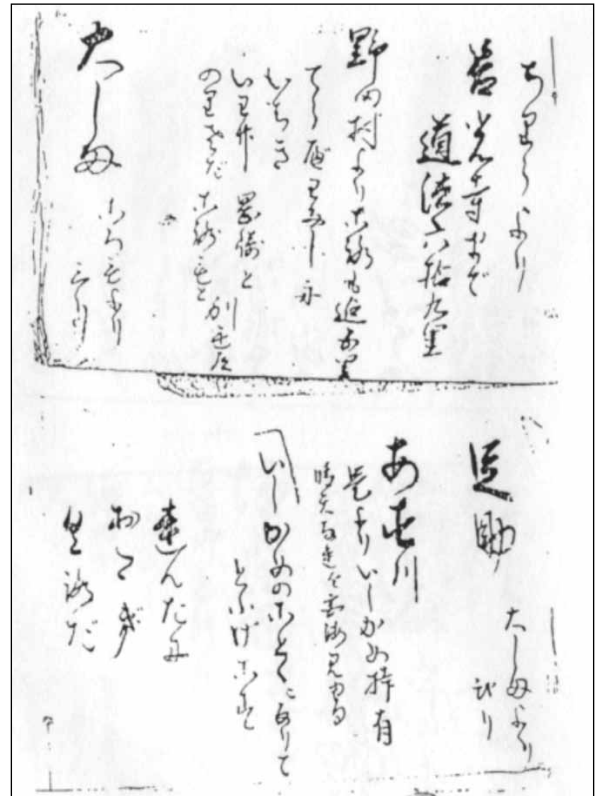


長野市善光寺の三州碧海郡寄進の常夜灯

上の方の写真をみてください。「三州碧海郡」と彫られています。つまりこれは碧海郡の有志たちがお参りをして、これを寄進した常夜灯です。下の方の写真は、丁度裏になるのですけれども、世話人の一覧が彫ってあります。これ幕末のもので、これ自体は、岡崎に直接関係ないのですけれども、岡崎の物流の話をするには、これを少し発展させて考えることはできると思います。

江戸時代には人びとは簡単に旅行はできません。江戸時代というのは農民をひとつの村に住まわせておいて、そこから動かないようにする。なぜ動かないようにするかというと、要するに先程いきました年貢を確実に取り立てるためです。農民がひとつの村に定住して、そこで米を作ってそれが年貢になるわけです。だからこの定住という前提が壊れると困るのです。ですから少しでも農民が動くことに対しては、幕府はいつも警戒しています。そのため旅行も自由ではない。ところが、ひとつだけ、ほとんど無条件に許可される旅行がある。何かというと信仰関係。伊勢参り、秋葉山参り、それから信州の善光寺参りです。これは信仰目的だからということで、ほぼ無条件に許可されます。では西三河からの善光寺参りはどういうルートを通っていったかというこ

となのですが、下の写真をみてください。これは刈谷市のあるお宅、稲垣恒夫さんという方なのですが、その方のお宅にあったものです。刈谷から善光寺までの旅日記です。それをちょっと見ますと、池鯉鮒・刈谷あたりからどこに行くかというところから挙母に行くわけですが、挙母から足助・稲武。そして稲武から飯田・塩尻・長野というルートなのです。



「善光寺詣道中日記帳」(刈谷市稲垣恒夫氏所蔵)

これは今、善光寺にお参りするためのルートという形で紹介しましたが、これは実は岡崎の物流にも非常に関わりのあるルートです。それが本題です。

三河湾というのは、元々は塩の産地です。昭和30年代までは、塩田があちらこちらにありました。実はこの塩が岡崎の物流と先程のルートに非常に深く関わっています。つまりこの塩を三河湾から岡崎経由で運んでいくのです。今でもJRに三河塩津という駅がありますね。塩津。まずここが出发点。塩津というのは要するに塩の港という意味です。そこからどうするか。船に塩を積みまして矢作川を遡って、岡崎まで持ってくる。その塩を陸揚げすると、塩座というのがあります。塩座というのは塩をあつかう商人たちの組織です。この商人たちがこの塩をほぼ独占的にあつかっています。ついでにいきますと、その塩座はかなり莫大な利益が出ます。その内の何割かを運上金として岡崎藩に納めます。岡崎藩の財政はかなりこの運上金によって潤っている。そし

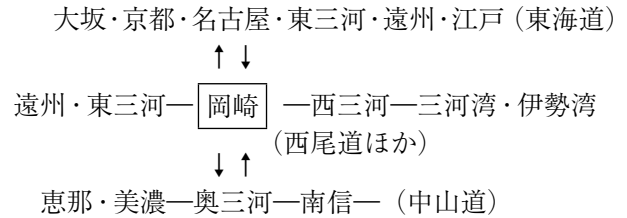
て、その塩をまた矢作川で運びます。矢作川を遡りまして寺部という、今は豊田市ですけれどもそこまで持って行きます。その寺部から今度は馬の背に載せまして運んで行く。最初はそんなに勾配がきつくないのですけれども、足助以降になりますと、だんだんきつくなります。そこで足助で塩を小分けにします。そして小分けした塩を馬の背中に積んで運んで行く。この馬を“中馬”といいます。そして稲武を越えまして最終的には塩尻に行きます。塩津から塩尻です。塩の港から塩のおしまいの点、塩尻。「塩の道」といいます。このルートは岡崎にとっても非常に大きな役割をもっているという、そういう話のつもりです。ついですが、これをちょっとご覧いただきましょうか。



「日本大正村」(岐阜県恵那市明智町)

上の写真は岐阜県恵那市明智町、「日本大正村」です。左上は、よく出てくる写真です。「日本大正村役場」。右下は、何の変哲もない大正村のはずれの風景です。奥の方に映っておりますのが私のゼミの学生たちです。この道を真っ直ぐ行くとどこに行くとお思いますか？足助に行くのです。つまり何がしたいかという、岐阜の山間部と三河の山間部はつながっているということです。ひとつの経済圏・文化圏を作っているのです。それを遡っていくと、結局岡崎が関わってきます。岡崎から、塩を中心としたいろいろな産物が足助に流れて、足助からまた信州や恵那へと物資が送られていく。だから、「岡崎王国」ということで岡崎が、西三河の中心という

ことを申し上げたのですが、実はそれだけではない。恵那郡や信州にもつながっている。というのが岡崎の物流の側面から占める位置ということができのです。



上の図をご覧ください。真ん中に岡崎があります。上は東海道を通じて例えば大坂・京都・名古屋・東三河から遠州・江戸につながっているという意味です。下の方は、今いったようなルートです。足助等々を通り、恵那とか美濃、それから奥三河、南信州、さらには中山道につながるわけです。それから1番中心部分は地元のいろいろな街道を通じ、遠州とか東三河、西三河内部に通じている。それからあとは三河湾・伊勢湾で海運がある。こういったことで、本当に網の目のような形で岡崎はいろんなルートでさまざまな地域とつながっています。そして先程申し上げましたような、例えば木綿、例えば菜種、それから塩ですね。そういった物資をそれこそ全国に運んで行く、その中心というのが岡崎の位置なのです。だからこれが要するに「岡崎王国」という意味です。

### 人とモノの流れと岡崎文化

先程来申しております物の流れ、それは当然経済的な基盤でもあります。それから当然人の流れもあります。そうすると情報が入ってきます。江戸から情報が入ってきます。京都からも情報が入ってきます。それから信州からも情報が入ってきます。そうしたものを接点に岡崎の文化というものは成立します。

次の一覧表をご覧ください。

#### 尾張国と三河国の藩

##### 〔尾張〕

- 尾張藩 (明治初期には名古屋藩)  
(徳川氏、61万9500石)
- 犬山藩 (成瀬氏、3万5000石)
- 高須藩 (松平氏、尾張藩支藩・海津市)

##### 〔三河〕

- \*多くの中小藩+幕領・旗本領・寺社領
- 刈谷藩 (土井氏、2万3000石)
- 重原藩 (板倉氏、2万8000石) \*福島藩

挙母藩	(内藤氏、2万石)
岡崎藩	(本多氏、5万石)
西端藩	(本多氏、9000石)
西大平藩	(大岡氏、1万石)
西尾藩	(松平氏、6万石)
吉田藩	(松平氏、7万石)
半原藩	(新城)(安部氏、2万2000石)
	*武蔵国岡部藩
田原藩	(三宅氏、1万2000石)

現在でも対比される尾張と三河、たしかに尾張と三河随分違います。それには歴史的な背景があります。簡単にいうと尾張はほとんど尾張藩だけでひとつの国を作っています。もっといってしまえば名古屋中心の地域です。名古屋だけが都市だとはいいませんが、まあそれに近い。ところが三河というのは中小の城下町が多い。つまり中小の藩が多く、その結果として城下町が多いのですね。たとえば西大平藩です。これは東名岡崎インター出たところにあった藩です。ここは1万石です。つまり藩としては1番小さな規模です。最低限の規模。そこで初代の殿様になったのは、大岡越前守です。大岡越前守が江戸町奉行を退任してから大名に取り立てられてここに領地を持ったわけです。西大平藩の場合は、城下町はほとんどなかったわけですが、より大きな藩にはお城もあり、それを中心に城下町が形成されました。岡崎・刈谷・西尾、東に行きますと吉田・田原。そうした城下町がありまして、そこではそれぞれ固有の文化が花開いたわけです。とくに岡崎の場合は先程いきました経済的な背景があります。それからいろんな情報も集まってきます。そこで江戸時代にも様々な文化が花開いたということになります。たとえば学芸が随分盛んだったのですね。とくに俳句。鶴田卓池という人がいます。江戸の後期ですけども、天保期の俳壇で「天保四老人」と称された。まあ“老人”というのは気になりますけれども…。全国区の文化人として名を馳せていたのですね。

梅の気力ひらくばかりになりけり  
 塙うちにいりし果報やうめのはな

こういう俳句を作っています。そして彼だけじゃなくて、彼の一派が大勢いてさまざまな活動をしていました。さらに俳句ではありませんが、町人たちが、雑俳とか狂歌などを作っている。このあたりは、『新編岡崎市史 近世学芸』(1984年)に詳しく載っています。なお、この『岡崎市史 近世学芸』は、近世の地域文化を扱った研究書としてすばらしいものだと思っています。それはさておき、近世の岡崎では文字文化はかなり盛んなの

です。つまり町人たちが文字を読むことができる、文字を自由に使うことができる。そして俳句とか狂歌というのは、サークルがあるわけです。皆んなで集まって俳句を詠みます。あるいは順番に俳句を詠んだりします。そういうサークルによって文化が伝播していきます。それから例えば茶道の宗偏流とか茶道も岡崎では非常に盛んでした。そのほかにも文化の例はありますが、時間が迫ってきましたので省略します。

## 近代の岡崎文化

ということで近世の岡崎では経済的にも三河全体の中心になっていることを前提に地域文化というものも大きな可能性を持っていました。それが明治以降の近代になりますと、交通の中心から外れていきます。また愛知県は尾張と三河から成り立ちます。そしてどうしても尾張中心の秩序が作られていきます。例えば毎年10月に「名古屋祭り」というお祭りがあります。「郷土の三大英傑行列」がメインのイベントです。まあ信長は悪くない。秀吉はいいでしょう。ところがなぜか家康がそこに出てきます、あれ不思議ですけどもね。家康はやはり三河のものだと思います。それを含めて「郷土の三大英傑」といってしまうのは名古屋人の驕りというより愛知県という地域に対する自覚のなさです。私にいわせれば。



臥雲 辰致のガラ紡(臥雲式紡織機)

ただやはり三河というのはしぶといわけです。ひとつの例。これはいわゆる「ガラ紡」です。元々これは信州の人が発明した、臥雲辰致という人が発明したのですけれども、これは三河で非常に盛んでした。この紡織機の特徴は、普通商品化できないような糸が短いような屑ですね、これを使ってこれがちゃんと糸になるということです。これが一世風靡します。戦後まで。こういった地を這うような努力をかさねていわば土俗的な近代化をした地域ですから、文化だって今でも廃れていくはずのものではな



いし、まあいろんな可能性を持っている、そんな地域だと思っています。



雑誌『鞭』第4号(1911年7月)

近代の岡崎文化の例として、明治末に岡崎で発行されていた『鞭』—ブランコという意味です—という文芸・思想雑誌の写真をあげておきます。

いろいろお話してまいりましたが江戸時代の「岡崎王国」という位置は現在も活かすことができるのだろうし、文化の面でもいろいろな形で活かすことができると考えております。ちょっと大急ぎでお話いたしましたので、だいふ端折った分がありますので、お聞き苦しい点があったかと思っております。どうもご清聴ありがとうございました。

写真の出典：岡田が撮影したもののほか、岐阜県郡上市HP・岡崎アーカイブスセンター（木村剛也氏）によりました。